

令和元年度 全国学力・学習状況調査結果と分析

新潟県立村上中等教育学校

令和元年度の全国学力・学習状況調査が3年生を対象に4月に実施されました。本校の結果を見ると全てで平均正答率が、全国・新潟県を大きく上回っています。以下、各教科の分析です。

		生徒数	平均正答数	平均正答率(%)
国語	新潟県立村上中等教育学校	79	8.9 / 10	89.0
	新潟県(公立)	17,433	7 / 10	74.0
	全国(公立)	938,797	7 / 10	72.8
数学	新潟県立村上中等教育学校	79	13 / 16	81.0
	新潟県(公立)	17,423	10 / 16	60.0
	全国(公立)	938,887	10 / 16	59.8
英語	新潟県立村上中等教育学校	79	16.3 / 21	77.0
	新潟県(公立)	17,413	12 / 21	55.0
	全国(公立)	938,888	12 / 21	56.0
英語 話すこと	新潟県立村上中等教育学校	79	2.8 / 5	56.0
	全国(公立)	917,978	2 / 5	30.8

【国語】

教科全体の平均正答率は 89.0%であり、全国平均・県平均ともに大きく上回った。調査実施生徒数 79 名のうち、9 問正解の生徒が最も多く 32 名、次いで 10 問正解の生徒が 29 名となっており、61 名が 9 問以上正解している。標準偏差が 1.2 であり、県及び全国の値と比較しても、学年全体のばらつきが小さいといえる。

学習指導要領の領域別、評価の観点別、問題形式別でも、すべての区分で 85%以上の正答率となっている。特に、「書くこと（書く能力）」は 91.8%、「読むこと（読む能力）」は 91.6%の正答率である。無答率については、無答の生徒がいた問題は 3 問、最大で 2.5%（2 名）となっている。1・2 年生の学習で継続して取り組んできた、「問いの意図をとらえること」「条件に合うように答えること」「自分の考えを表現すること」に関わる力がおおむね身につけてきていると考えられる。

正答率が低かった問題は、話し合いの話題や方向をとらえて自分の考えをもつ趣旨で出題されたものである。話し合いの流れを踏まえ、「どうするか決まっていけないこと」について自分の考えを書く問題であり、正答率は 78.5%にとどまった。①～③の 3 つの条件を満たして解答する必要があり、正答とならなかったものを見ると、条件①③を満たし②を満たしていないものが 5 名、それ以外が 11 名である。つまり、正答とならなかった生徒のうち、一部の条件を満たさず正答とならなかった生徒よりも、条件を満たさない解答をした生徒の方が多かったことになる。全国平均正答率も比較的低い問題ではあったが、問いの意図をとらえ、条件に合わせて答える力を全員に確実につける指導を充実させていく必要がある。

【数学】

教科全体の平均正答率は 81.0%であり、全国平均・県平均ともに大きく上回った。調査実施生徒数 79 名のうち、正答率 90%以上の生徒が 27 人、80%以上の生徒が 22 人と、学年の半数以上が正答率 80%を超えている。

評価の観点別で見ると、「数学的な技能」「数量や図形についての知識・理解」に関して、ともに正答率が 89%と高く、数学的な知識や技能はよく身につけていることが分かる。「数学的な見方や考え方」についても 73.3%であり全国平均(47.1%)・県平均(47.7%)を大きく上回る結果となった。問題形式別で見ても、記述式問題の正答率は 72.2%と昨年度の結果(54.1%)を大きく上回っており、授業の中で「自分の考えを他者に言葉で表現する場面」を継続して取り入れてきたことや、後期生への接続を考えながら「解答の書き方」について指導してきた成果であると考えられる。

領域別では「数と式」「図形」で正答率が約 90%と高い。しかし、「関数」に関しては 66.2%と低い正答率になっている。全国平均と比較すると約 25%上回る結果ではあるが、今後重点的に指導する必要があると考える。最も正答率が低かったのは、「冷蔵庫 A の使用年数と総費用の関係を表すグラフについて、点 P の y 座標と点 Q の y 座標の差が表すものを選ぶ」問題で、49.4%であった。全国平均も 38.8%と低い正答率の問題であるが、グラフから読み取れる情報について、日常生活と関連させながら復習したい。

【英語】

正答率が 50%程度または 50%を大きく下回った問題は、以下の 4 つであった。

①来日する留学生の音声メッセージを聞いて、部活動についてのアドバイスを書く問題、②チンパンジーに関する説明文とその前後にある対話を読んで、書き手が最も伝えたい内容を選択する問題、③食糧問題について書かれた資料を読んで、その問題に対する考えを書く問題、④学校を表す 2 つのピクトグラムを比較して、どちらがよいか理由とともに意見を書く問題。4 問中、3 問が **Writing** の分野であることに、大きな課題を感じた。そのうち①については、無解答率が 19%と高くなっており、聞いて把握した内容に、適切に答えることができなかつたことが分かる。**Listening** と **Writing** という領域をまたぐような活動を授業中に行い、スピーディに情報処理ができる、あるいは必要だと思ったことをメモさせるようなトレーニングをする必要がある。②については、説明文の論旨を理解する問題である。大量の英文から何が最も作者の言いたいことなのか、論説文を扱うときに今後意識させたい。③・④については、無解答率がそれぞれ 2.5%と 0%と積極的にチャレンジはしている。生徒の普段の英作文を見ると、過去に習った文法があと一歩のところで正しく使えない場面が多く見られる。いままでの文法を自分でまとめて整理するインプットの学習（新研究的な学習）とともに、大量のアウトプットの学習の両方が必要だと感じた。

今回の結果を受けて、これからは **Writing** に主眼を置いて、授業を進めていきたい。